

ここ通編集委員によるレポート

第28回県民健康調査検討委員会（10月23日）での発表によると、小児甲状腺がんまたは疑いと診断された子どもは、前回から3人増え194人となった。内訳は、先行検査116人、2巡目71人、3巡目7人（+3人）。155人が手術を終え154人ががんと確定した（良性結節1人）。新たに増えた3人は、前回の検査では、異常なしとされていた（A1判定1人、A2判定2人）。中通り2人、避難区域等13市町村1人。前回、委員会として了承もしいまま、市町村別人数は非公表と既成事実化されてしまった。「個人の特定につながる」との理由だが、これまでは1人でも公表してきており説得力はない。なにか都合の悪いデータを隠す意図があるとは思えない。

新たに委員となった大阪大学講師の高野徹委員は、「小児甲状腺がんは、良性にちかいがんとされ死亡例もないが、手術した瞬間から、がん患者として人生を送らなければならない」「過剰診断は深刻な問題で、検診率を向上させるのが本当にいいことなのか」と、現状が「過剰診断である」という前提で意見を述べた。しかし現場で執刀している県立医大の鈴木真一教授は、過剰診断を否定しており、学会で発表した資料には、肺に転移した症例も明らかにしている。「予後がよい」のは、一般的な大人の甲状腺がんのデータであり、転移するようながんを良性とは言えないはずだ。

清水一雄委員の「細胞診の頻度が1巡目は40%ちかかったが、3巡目は5.4%とかなり減ってきている。」という質問に対し、県立医大の津留留教授は「2回目、3回目は前回の画像があり、（細胞診の）適用の割合が下がっている。5～10mmは非常に慎重にやっている」と回答した。前回の検査で異常なしとされながら、2～3年の間に甲状腺がんを発症している症例が多いにもかかわらず、「前回の画像に基づいて」診断し、細胞診を行なう患者の数を減らしているとなると、検査として信頼できないばかりか、データ上のがんの発症数を少なく見せるための恣意（しい）的な行為であることは明らかだ。

今回、チェルノブイリで甲状腺治療の医療支援をしており、甲状腺検査の受診を勧めてきた、委員のなかでは唯一の甲状腺専門家である清水一雄委員が甲状腺評価部会から外された。星北斗座長が「検討委員会と評価部会の兼任は好ましくない」と発言したが、甲状腺を専門に検討する部会に甲状腺の専門家がいなかった。そして、甲状腺検査に否定的な高野徹委員だけが、兼任となっている。津留留教授は「甲状腺検査は、希望者に対して対応する」とも述べた。増え続ける甲状腺がんの原因を追究せず、議論にフタをすることが役割の「科学者」など百害あって一利なしだ。子どもたちの命を守るために、甲状腺検査の縮小は絶対に認められない。

〈甲状腺がんまたは疑いの子ども〉 2017年10/23発表

	先行検査	本格検査	
		2巡目	3巡目
甲状腺がん・疑い	116人	71人 <small>1巡目結果内訳 未受診1人 A1:33人 A2:32人 B:5人</small>	7人 <small>2巡目結果内訳 A1:1人 A2:5人 B:1人</small>
手術実施	102人	50人	3人
がん確定	101人	50人	3人
年齢(発症当時)	6歳～18歳	5歳～18歳	8歳～13歳
性別	男性39人:女性77人	男性32人:女性39人	男性4人:女性3人
腫瘍径	5.1mm～45.0mm	5.3mm～35.6mm	8.7mm～17.5mm
対象人数	36万8000人	38万1000人	33万6000人
対象者	原発事故当時18歳以下	原発事故当時18歳以下 +事故後1年間に産まれた子ども	
実施人数	300,476人	270,516人 (2017年6/30現在)	138,422人 (2017年6/30現在)
実施年度	2011年10月～2015年4月	2014年4月～2016年12月	2016年5月～
二次検査対象者	2,293人	2,227人	754人
A1・A2以外	1,379人	1,365人	331人
穿刺(せんし)細胞診受診者	547人	205人	18人
穿刺細胞診受診率	39.7%	15.0%	5.4%

〈がんまたは疑い 市町村別内訳〉 良性1人は含まない

国が指定した避難区域等の13市町村	中通り地方	会津地方
川俣町 2	福島市 22	檜枝岐村 0
浪江町 4	二本松市 6	南会津町 0
飯館村 0	本宮市 6	金山町 0
南相馬市 6	大玉村 2	昭和村 0
伊達市 9	郡山市 43	三島町 0
田村市 5	桑折町 1	下郷町 1
広野町 0	国見町 0	喜多方市 3
楡葉町 0	天栄村 0	西会津町 0
富岡町 1	白河市 7	只見町 1
川内村 1	西郷村 2	猪苗代町 1
大熊町 3	泉崎村 1	磐梯町 0
双葉町 0	三春町 1	北塩原村 0
葛尾村 0	須賀川市 5	会津美里町 1
不明(※) 3	鏡石町 1	会津坂下町 1
計 34	中島村 1	柳津町 0
	矢吹町 1	会津若松市 8
	石川町 1	湯川村 1
	矢祭町 0	計 17
	浅川町 0	
	平田村 1	
	棚倉町 2	
	埴町 1	
	鮫川村 0	
	小野町 0	
	玉川村 0	
	古殿町 0	
	不明(※) 4	
	計 108	

※3巡目の結果は、市町村別ではなく、「避難区域」「浜通り」「中通り」「会津地区」の4地域別の公表になったため、市町村別の人数は不明です。

見て歩き「コミュタン福島」を見学してきました



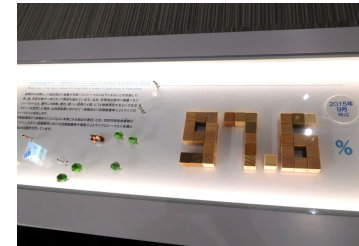
昨年7月に三春にオープンした県の施設、環境創造センターの交流棟「コミュタン福島」を見学してきました。はじめ建物を間違えて本館に入ってしまう、IAEA（国際原子力機関）の会議の参加者とはち合わせでした。つまりここは、そういう施設（バリバリの原発推進！）だということなのです。

広島原発資料館は、内部被曝が軽視されているなど問題点もありますが、原発への怒り、核兵器廃絶への決意をかきたてられます。ところが、この「コミュタン福島」を見学して一番の驚きは原発批判がまったくないことです。福島第一原発事故現場の精巧なジオラマはありますが、あとは「あれから、こんなに復興していますよ」という展示しかありません。そして「放射線はもともと自然界にこんなにあるものなんです」という展示体験コーナーで、子どもたちに「福島は大丈夫なんだ」と思わせる内容になっています。すでに200を超える県内の小学校が見学学習に使っており、事故前まで行われていた原発見学学習が、「放射能（は怖くない）学習」に変わっ

ただけともいえ、あの事故はいったいなんだったのだという別な怒りがこみ上げてきました。

「他県での原発の再稼働や海外への輸出は仕方ない、それより福島の復興だ」、そんな価値観の子どもたちがこの福島から生み出されることなど絶対にあってはなりません。教職員組合はじめ労働組合が問われていると、あらためて思いを強くして帰路につきました。

（動労福島・遠藤）



「年間1ミリシーベルト以下のところが97.6%にもなっていますよ」という展示。分母に避難指示区域や



「高級外車が1台買えますよ」という特製の大型「霧箱」。たくさんの放射線が軌跡をえがく。「自然界にはもともとこんなに放射線があるんだよ」、係のお兄さんの説明に子どもたちは「怖くないんだね」と思うのだろうか…

お母さんのアンテナ 軽そうで重い話



福島原発事故後の健康被害についての「損失余命」という言葉を知ってますか？

なに～？この「ソソツヨメイ」って、という方も多いと思います。損失余命とは、食事や行動などにどれだけのリスクがあるかを寿命の減少として、生まれたとき満タンの余命がどのくらい減っていくのかを表したものだそうです。

例えば、「ひじきの煮物を食べると58分、たばこを吸うと12分縮まる」なんて書いてあります。また「1kgあたり2,400Bqのイノハナ（山のきのこ）が10g入ったご飯を1合食べた場合、損失余命は7秒。一方で、自動車を10km運転する場合に、事故死する確率から計算した損失余命は21秒。イノハナご飯を食べるより、自動車を運転するほうが3倍程度リスクが高いんです。」などとも書いています（出典はいずれも、すばる舎刊『それで寿命は何秒縮む？』）。では今回の原発事故での被ばく影響はどのくらいになるかというと、「日本人」というかなりザックリとしたくくりだと「0.6日」だけ早く人生が終

わるのだそうです。半日とちょっとだけ早く死んじゃうよってことです。原発事故のリスクは、そんな程度の話ですよって言ってるわけですよ。へ～、たいしたことないじゃん、安心した～って思いましたか？もちろん日本人の平均だから福島原発がある福島県やその周辺はもっと早く寿命が縮まるってことですけどね。

地域によっては「苦しまずにあの世に逝けるよう」と『ころり観音さま』参拝をしたりもしますが、それは寿命を全うするときの話です。

生活の中でさまざまリスクはあるでしょう。アッチを気にすればコッチがあるそかになることも…。でもどこかで折り合いをつけて自分を納得させて生きているのも確かです。

原発事故でのリスクは理不尽で矛盾だらけなのに、その被ばくリスクを無責任に、しかも上から目線で論点をズラして、無用な被ばくを推奨するようなあやしげな話にはだまされませんよ。「損失」があるなら「獲得」があってもいいはずですよ。負けずにがんばりましょう。